〈授業報告〉

コロナ禍における「体育史」授業報告
―3 年間の授業記録と遠隔授業の振り返りを中心に―

木村華織 *

1．はじめに

新型コロナウイルス感染症（以下、COVID-19）の世界的蔓延から 3 年目を迎えた。2020 年の感染拡大時に生じていたような混乱はみられなくなったものの、大学も含め教育現場での苦労は絶えない。従来の業務に加え、感染症対策、感染者が発生した際の対応等に追われる日々が続いている。2020 年度の春学期は、多くの大学で開講時期を 1 ヶ月程度延期しながら遠隔授業の準備を進め、手探り状態で授業はスタートした。教員も学生も不慣れな中ではあったが、教育活動を止めないこと、学生を不安にさせないことを第一に、コロナ禍での授業が進められた。

遠隔授業が開始されて 2 年以上が経ち、コロナ禍がもたらした学生たちへの影響も明らかになってきている。一般社団法人日本私立大学連盟が 2022 年 9 月に発行した「新型コロナウイルス禍の影響に関する学生アンケート報告書（概要版）」[1] によれば、コロナ禍で学生に生じた変化として、「経済面」「人間関係」「授業」の 3 点があげられている。「経済面」では、思うようにアルバイトができず収入減少の状況が続いること、「人間関係」では、友人と話せないことや課外活動への参加が制限されることにより、人間関係が希薄になっている点が指摘されている。「授業」については、「学び」「受講方法」「健康への影響」がオンライン授業への改善要望の中心にあげられていた。詳細は後述するが、レポート課題を減らしてほしいという声や資料配付型授業への改善を求める声からは、オンラインツールを有効的に活用しながら教育の質を担保し、より充実した学びに繋げることが大学教員には求められているといえる。

本稿では、2020 年から 2022 年までの 3 年間にわたるコロナ禍での授業方法について、「体育史」を事例に報告する。2020 年から始まったコロナ禍での授業は試行錯誤の連続であり、大学では感染状況に応じて「遠隔型」「面接・遠隔型の併用」「面接型」を用いて授業を展開してきた。以降では、コロナ禍における全国の大学等の授業実施状況とそこでの課題を文科省等の報告書を通して概観した後、筆者の担当した体育史の授業について報告する。

2．コロナ禍の大学等における授業の実施方針と課題

（1）大学等における授業の実施方針

文科省では、2020 年 4 月以降、授業の実施状況や実施方針に関する調査を定期的に行っている。本節では、それらの調査報告書に基づき大学等での授業実施の現状を把握しておきたい。

表 1 は文科省のホームページに掲載されている「新型コロナウイルス感染症の状況を踏まえた大学等の授業の実施状況について」[2] の 3 回分の調査結果のうち、「授業を実施している」と回答した学校の「授業の実施方法」をまとめたものである。COVID-19 が蔓延し、遠隔授業が矢継ぎ早にスタートした時期にあたる 5 月 20 日時点では遠隔授業が 90％を占めていたが、6 月 1 日には遠隔授業の割合が 60.1％に

* 東海学園大学スポーツ健康科学部

まで減少し、面接授業と遠隔授業を併用する大学が30.2%となった。さらに7月1日になると、遠隔授業のみを実施する大学は23.8%となり、60.1%が面接・遠隔授業の併用へと開講形態を変更していた。

本学スポーツ健康科学部では、6月1日時点は遠隔授業のみ、7月時点では面接・遠隔授業を併用する開講形態に変わっていた。大学内での面接および遠隔授業の判断は、全学で一律に決定されるというわけではなかった。授業特性や受講者数、感染リスクに対する安心・安全に配慮しながら、学部ごとに開講形態が決定された。

表1. 新型コロナウイルス感染症の状況を踏まえた大学等の授業の実施状況

調査時点	2020/5/20	2020/6/1	2020/7/1
回答数/学校数	864/1,075校	1,066/1,069校	1,069/1,069校
面接授業	27校(3.1%)	103校(9.7%)	173校(16.2%)
面接・遠隔を併用	59校(6.8%)	322校(30.2%)	642校(60.1%)
遠隔授業	778校(90.0%)	641校(60.1%)	254校(23.8%)

※ 5/20時点の調査の回答率は約82.8%（全1075校中890校から回答あり）。表1の5/20の結果は、5/20時点で授業を実施していると回答した864校を母数にした結果である。

※ 6/1時点の調査においても「授業を延期･中断している」との回答が0.3%（3校）ある。

（文科省ホームページ掲載データより木村作成）

次に、上記の調査を引き継ぐ形で実施されている「大学等における授業の実施方針に関する調査の結果について」[3] をみてみる。この調査は、実際の実施形態を問うものではなく、調査時点での方針、すなわち予定を問うものとなっている。そのため、感染状況によって実際とは異なっている場合もある。表2に現在までに公表されている2021・2022年度の前期・後期、計4回の結果を示す。ここで使用されている「前期・後期」は「春学期・秋学期」、「対面」は「面接」と同義である。本節においては報告書の記載（前期、後期、対面）をそのまま用いることとする。

COVID-19の感染拡大からおよそ1年後の2021年前期には「全面対面（36.4%）」「ほとんど対面（28.9%）」、後期は「全面対面（36.2%）」、「ほとんど対面（28.7%）」となり、対面での授業を予定していた大学等が65%近くに及んでいた。2022年度前期は「全面対面（55.5%）」、「ほとんど対面（32.3%）」、後期は「全面対面（64.1%）」「ほとんど対面（29.9%）」となり、2022年度は90%近くが「対面」に移行することを予定していた。

この期間、COVID-19の感染者数が一時的に減ずることはあったが、終息の兆しがみえていたわけではない。しかし、大学生活においては学生の学習機会の担保、学生同士や教員との人的交流の減少による人間関係の希薄さも課題になっていたこと、さらに感染症対策に関する知識が身についてきたことなどもあり、2021年度以降は実施形態が対面に移行されていった。

本学においても全面面接授業への移行を目指して準備を進めていたが、スポーツ健康科学部では感染症下での教室収容定員の条件を満たすことが難しい比較的規模の大きな講義科目については、2021年度度も遠隔授業を継続した。対面授業の実施を目指すものの、感染症対策との折り合いが付かずに遠隔で進めることを余儀なくされる場合もあった。スポーツ健康科学部における2021年度の授業実施形態は、「7割が対面」または「半々」という状況であった。

表 2.　大学等における授業の実施方針に関する調査の結果

開講時期	2021 年前期	2021 年後期	2022 年前期	2022 年後期
調査期間/時点	R3.3.19-3.31	R3.10.7 時点	R4.3.22 時点	R7.9.30 時点
母数	1,064 校	1,158 校	1,165 校	1,163 校
全面対面	387 校(36.4%)	419 校(36.2%)	646 校(55.5%)	745 校(64.1%)
ほとんどが対面	307 校(28.9%)	332 校(28.7%)	376 校(32.3%)	348 校(29.9%)
7 割が対面	188 校(17.7%)	213 校(18.4%)	94 校(8.1%)	52 校(4.5%)
半々	154 校(14.5%)	166 校(14.3%)	41 校(3.5%)	(16 校)
3 割が対面	25 校(2.3%)	25 校(2.2%)	(4 校)	(1 校)
ほとんどが遠隔	3 校(0.3%)	3 校(0.3%)	(3 校)	(0 校)
面接授業の実施はなし			(1 校)	(1 校)

（文科省ホームページ掲載データより木村作成）

(2) コロナ禍での授業に関する課題

2022 年 9 月に発行された「新型コロナウイルス禍の影響に関する学生アンケート報告書（概要版）」[4)] を用いて、コロナ禍における大学生活とオンライン授業における課題について抑えておきたい。

上記調査では、学生の現状として「安心安全欲求の顕在化が示された」と総括されている。学生の悩みや不安は就職・将来が中心であり、学費に関する説明や経済的支援の見直しを求める声、大学に対しては授業形態の適切な使い分けも求められている。また、コロナ禍で学生に生じた変化として、先に触れた「経済面」「人間関係」「授業」があげられている。このうち「経済面」では、アルバイトができないことによって収入減少の状況が続いており、収入が大きく減少（50%未満）になった学生は預貯金を切り崩したり、生活費を切り詰めたりして節約するなど、生活の根底が揺らぎ、学業への影響も出ているとの指摘がなされている。経済的困窮を訴える学生は多く、国や大学の支援があるとはいえ十分とはいえない。

「人間関係」では、人間関係が希薄になっている点が指摘されている。大学生活で不満に感じることに関する設問の上位 5 つは、1 位「友人と会って話したり食事したり遊んだりできないこと（41.6%）」、2 位「施設設備費・拡充費や学費の減額がないこと（39.8%）」、3 位「大学での友達ができないこと（24.0%）」、4 位「クラブ・サークル活動に参加できないこと（17.9%）」、5 位「大学の施設があまり使えないこと（15.9%）」となっており、人間関係に関するものが上位 1・3・4 位を占めている。コロナ禍において学校に行かれない、課外活動ができないという状況は人間関係にも影響を与え、「大学での友人ができない」という状況は精神的不安や孤独感を増大させる要因になっていると考えられる。

「授業」についてみてみると、オンライン授業への改善要望として「学び」「受講方法」「健康への影響」への回答が多く寄せられていた。「学び」については、「レポート提出課題を減らしてほしい（34.6%）」、「レポート課題に対するフィードバックが欲しい（22.0%）」、「オンラインでも理解がしやすいように工夫してほしい（18.4%）」とある。「受講方法」では、「授業は録画して公開してほしい（39.1%）」、「YouTube などで授業を公開して欲しい（10.9%）」、「受講方法に関する説明を丁寧にして欲しい（9.5%）」である。そして「健康への影響」については、「目の疲れなど身体的疲労を考慮して欲しい（22.1%）」であった。その他にも自由記述に示された学生の声には、「資料を配付するだけの講義があり十分な知識を獲得できない。」「授業が PDF のみ配布は改善すべき。せめて動画を配信すべき。」「簡単な配付資料のみで、音声や動画を一切配信しない講義もあり不満に思う。」などがあげられていた。

この調査は、2021 年 12 月から 2022 年 1 月にかけて実施されたものであるが、自由記述にある学生

の声は調査以前からある程度は指摘されていたものであり、本調査を通して大学教員の行う授業実態と改善点が明確に示されたといえる。本学においても遠隔授業と課題提出に追われ、一日中スマートフォンやパソコンに向き合う学生の姿があり、全学的にもレポート課題が過剰にならぬよう注意喚起がなされていた。オンライン授業の実施にあたっては、面接授業と同等の教育内容および質の担保はもちろんのこと、オンラインでも理解し易い授業への改善、健康への配慮、そしてICT（情報通信技術）を活用できる教員自身の能力開発が求められている。

3. 2020-2022年度「体育史」の授業運営

（1）開講形態

本学では2020年度の開講以来、見直しを加えながらCOVID-19に対する活動指針レベル0～6を設定し、運用してきた。2020年度は活動指針レベルも頻繁に変更が加えられ、2021年度に入りようやくレベルに応じた開講形態が固まってきた。活動指針レベルの判断は、大学所在地である愛知県の感染症警戒レベルと方針を踏まえて決定された。レベルに応じた授業の実施形態は、授業特性に応じながら遠隔授業と面接授業の区分けが学部ごとになされた。

本稿で扱う体育史は比較的規模の大きい講義科目ということもあり、すべての開講科目が面接授業になるレベル1以下にならない限り、遠隔授業での実施となる。一方、少人数で行われる実技科目や実験科目はレベル4以下で面接授業となるため、学生たちは1日の中で遠隔授業と面接授業の両方に対応することになる。そのため､学内にいるにも関わらず各自のスマートホンやタブレット､情報教育センターのパソコンで遠隔授業を受ける状況が生じていた。

コロナ禍で授業が開始された2020年度から2022年度までの体育史の開講形態を表3に示す。なお、体育史はいずれの年度も春学期に開講された。表からも分かるように2020年度は未知なるウイルスに翻弄されながら、教育活動を止めないために様々な形態が模索された時期といえる。2021年度は感染症への対策が少しずつみえてきた中で、実技・実習・演習科目を中心に面接授業を再開させた時期。そして2022年度は、感染症対策を講じながら、ほぼ全ての授業で面接授業が再開された時期と位置づけることができる。

表3. 体育史の開講形態（2020-2022年度）

年度	開講形態			定期試験
2020年度	第1期：遠隔授業 同時双方向型	第2期：分散登校 遠隔・面接の併用	第3期：面接授業 教室を分けて実施	遠隔受験
2021年度	遠隔授業（同時双方向型） ※各自または指定された教室で遠隔授業を受講する			教室受験
2022年度	面接授業（感染症対策を講じて教室にて実施）			教室受験

（2）授業運営の概要

1）2020年度遠隔授業開始に向けた授業の見直し

本学部では、学生の生活リズムの崩壊や孤独感の軽減を図るため、時間割通りオンタイムで始業することが指示された。その上で、同時双方向型、オンデマンド型、課題提示型のいずれかで授業を実施することとなった。体育史では同時双方向型を採用し、その中でリアルタイムでの説明と解説動画を組み

合わせた形で授業を展開した。

日本私立大学連盟の調査報告にある「オンライン授業への改善要望」の内容は、遠隔授業開始前にも大学教員間の情報共有ネットワーク等[5]で話題にされていたため、面接授業に近づけつつ、遠隔でも理解し易い授業教材、そして何度でも見返せる動画教材を提供し、健康への影響に配慮した授業運営を心がけた。

授業の変更点として、第一に毎時完結型の授業を目指し、単元を次週に持ち越さないようにした。また、解説時間を短縮するために授業で用いるパワーポイントの内容を一部カットし、解説はパワーポイントファイルに事前に録音して配信することで授業の時間配分をコントロールした。コロナ禍以前は約 70 分をあてていた授業解説を 60 分程度に短縮することで、その分を授業の振り返りにあて確認クイズを行うことにした。その他に、授業時に使用した解説付きパワーポイント動画は、授業終了後に授業支援システム Teams にて履修者全員に共有し、学生が自由に閲覧できるようにした。2020 年度のおよその授業運営は以下の通りである。

2020 年度以降、開講形態が毎年変わっているが、表 4 の流れをベースに感染状況等に応じて方法を変えながら 2022 年度まで実施してきた。なお、2020 年度については、学期中に遠隔授業→分散登校による面接・遠隔授業の併用→面接授業と移行している。2020 年度の授業方法の詳細は木村（2021）を参照されたい。

表 4.　2020 年度の開講形態と授業運営方法

時間	課程	第 1 期：遠隔授業 同時双方向型	第 2 期：分散登校 遠隔・面接の併用	第 3 期：面接授業 教室を分けて実施
0～10 分	前時の復習 本時の説明	担当者によるライブでの解説		
10～35 分	解説①	音声解説付きパワーポイント動画を画面共有にて配信	面接受講者は教室で受講、遠隔受講者には教室での授業を配信（隔週交代）	教室①は面接、教室②は①の授業を配信
35～40 分	休憩	休憩	休憩	教員は教室移動
40～65 分	解説②	音声解説付きパワーポイント動画を画面共有にて配信	面接受講者は教室で受講、遠隔受講者には教室での授業を配信（隔週交代）	教室②は面接、教室①は②の授業を配信
65～90 分	本時の 確認クイズ	オンラインにて 配信・回答	オンラインにて 配信・回答	オンラインにて 配信・回答

2）2021 年度の授業運営方法

2021 年度に入る頃には、大学の活動指針レベルや各学部の授業実施形態もある程度固まってきた。体育史は、活動指針レベル 1 以下の場合のみ面接授業とされ、それ以外のレベルの場合には遠隔授業で行うよう定められた。2021 年度春学期は活動指針レベル 3 で開始されたため、体育史は遠隔授業でのスタートとなった。春学期の途中には愛知県に緊急事態宣言が発出され、5 月 15 日から 6 月 27 日までは活動指針レベル 5 となり、ほぼ全ての授業が遠隔授業へと変更された。その後、6 月 28 日以降は再

びレベル3となった。学期中に授業形態が変更されることはあったが、2020年度の3パターン実施に比べれば、授業実施に対する混乱は軽減されていた。

2021年度の体育史は学期を通して遠隔授業であったため、時間割通りに始まり担当者が研究室からライブまたは音声解説付き動画を配信するかたちで実施した。活動指針レベル3の時には実技や実験科目が面接授業で行われていたこともあり、体育史の授業開始までに帰宅できない学生やクラブ活動のために学内に残り、遠隔授業を受ける学生もいた。筆者の授業では、学内にいる学生が教室のスクリーンを通して受講できるよう教室を準備し、希望者は利用できるようにした。

実際に教室で受講する学生は毎回6-8名程度と少人数ではあったが、学内に残る学生たちに受講方法の選択肢を提供できたことや授業に関する学生間での対話がなされていたこと、健康面でいえばスマートフォンを注視する時間を減らすことができた点は良かった。また、授業前後の短時間ではあったが受講者と言葉を交わす時間は、授業担当者にとって授業への反応を直接感じ取ることのできる貴重な機会となった。

3）2022年度の授業運営方法

2022年春学期は活動指針レベル2からのスタートとなった。2021年度までであれば遠隔授業であったが、2022年度の授業実施については「教室定員上限を設け、可能な限り多くの科目を面接授業とする」という大学の方針が示された。これにより、教室が確保できた体育史では、2019年以来の全面面接授業が行われることとなった。とはいえ、コロナ禍以前に戻るわけではなく、面接授業は間隔を空けた座席、窓を開けた換気、マスクの着用、使用する机・椅子の消毒、これらの感染予防対策を講じた上で行われた。

授業運営は2020年度、2021年度の方法を踏襲するかたちで行った。変更点は音声解説付き動画を配信していた部分を教室でのライブ解説に切り替えたことであり、Formsを用いた確認クイズも引き続き行うようにした。他方で、大勢が教室に集まる面接授業では遠隔時のようにスムーズに授業に入ることは難しく、学生の意識をこちらに向けさせるための対話や余談なども盛り込むことになる。また、教員の説明が長くなってしまうという自身への課題も生じてしまい、遠隔時のようにスムーズな進行ができない場面もあった。

一方、授業後の確認クイズは、学生にとって資料や教科書を用いながら授業内容を復習する機会となり、担当者にとっては学生の理解度を把握する機会になっていた。さらに自由記述の回答からは、授業内容が学生の知的好奇心を刺激するものになっているのか否かを確認することもでき、授業担当者にとっても有益なツールとなった。コロナ禍以前は一方的な授業になりがちであったが、確認クイズの結果を踏まえた翌週のフィードバックや学生の意見の紹介など、間接的にではあるが学生と対話する機会も増えた。

授業運営の方法として、2022年度の面接授業では動画教材を遠隔授業時よりも多く用いることができ、授業への理解を助けることに繋がったといえよう。遠隔授業の際にも可能な範囲で動画教材を用いたが、画面共有機能を使っての動画配信には制限があり、学生に見せられる動画教材が限定された。授業で扱う時代を映画等の動画教材を用いてイメージさせることで授業内容をより深く理解できる場合もある。こうした点は面接授業になって授業が充実した点といえるだろう。2022年度の面接授業を通して、遠隔授業に対応するための改善や工夫が、面接授業をより良くすることに繋がったと感じられた。

4．遠隔授業の評価～学生たちの声を手がかりに～

（1）2019年度と2021年度の授業評価アンケートの比較

学生たちによる授業評価を用いながら遠隔授業の運営方法について振り返る。2019年度（面接授業）

と 2021 年度（遠隔授業）の授業評価アンケートの結果を表５にまとめた。表中のＡ・Ｂはクラスを示している。ここでは、授業内容・授業方法に関する設問、授業による学生自身の成果に関する設問のうち、2019 年度と 2021 年度に共通していた設問を抜粋した。なお、自由記述を除く設問は５段階で評価され、2021 年度には遠隔授業用の設問が一部追加されている。

表５の各設問の評価ポイントをみると、「教材やパワーポイント教材の使い方が効果的か」については、2019 年度に比べるとややポイントを落とす結果であった。「教員の説明は分かりやすいものか」「教員の話し方は聞き取りやすかったか」については、クラスによる違いはあるものの概ね現状維持ができたといえる。遠隔授業を行うにあたり最も不安だったパワーポイント教材については、字を大きくしたり、文字数を減らしたりして改善はしたものの、スマートフォンでの受講に十分に対応していなかった点やカラーユニバーサルデザインを十分に意識できていなかった点は、配慮不足だった。

また「授業内容への興味・関心が増したか」では、微増であるが評価ポイントが高くなっている。自分のペースで落ち着いて授業を受けられる遠隔授業は、これまで以上に授業への興味関心を高められる要素を持っていることがうかがえる。一方で「自分で調べ、考える姿勢が身についたか」は、確認クイズの導入によって評価が高まると考えていたが、明らかな効果は確認できなかった。

表５をみる限りでは、評価ポイントの微減はあるものの、全授業を遠隔で行った 2021 年に大きくポイントを落とした設問はなく、ある程度はコロナ禍以前の教育内容の質を担保できたといえそうだ。とはいえ、改善の余地は十分にあることから、遠隔授業の特徴を生かした授業のあり方については今後も理解を深め、教員の ICT 教育のスキルを高めるべきといえよう。

表 5.　2019 年度（遠隔授業）と 2021 年度（面接授業）の授業評価アンケートの結果

設問内容	2019A	2019B	2021A	2021B
シラバスにもとづいて授業が行われたか	4.06	3.93	3.88	4.20
教員の説明はわかりやすいものか	4.10	4.22	4.08	4.25
教材やパワーポイントなどの使い方が効果的か	4.13	4.32	3.98	4.25
教員の話し方は聞き取りやすかったか	4.11	4.32	4.18	4.24
授業内容はよく理解できたか	4.00	3.99	3.89	4.19
シラバスに書かれている到達目標を達成できたか	3.91	3.75	3.76	4.02
授業内容への興味・関心が増したか	3.87	3.87	3.94	4.07
自分で調べ、考える姿勢が身についたか	3.97	3.88	3.84	4.05
課題は適切だったか	－	－	4.04	4.33
課題や質問に対して教員からの回答があったか	－	－	3.80	4.19
授業は総合的に見て満足いくものか	4.10	4.01	3.96	4.36

※回答数は、2019A：70 人、2019B：92 人、2021A：50 人、2021B：56 人である。
※ 2019 年度と 2021 年度の「体育史」授業評価アンケート（Ａ・Ｂクラス）の結果から作成。

(2) 2021 年度の授業評価アンケート～自由記述から～

次に 2021 年度の授業評価アンケートにおける自由記述内容から、遠隔授業を振り返ってみたい。アンケートには、問 25「この授業で良いと思うことを記述してください」、問 27「遠隔授業で改善して欲しいと思うことがあれば記述してください」という自由記述形式の設問が設けられている。

はじめに問 25 の回答をみてみる（表 6）。回答数は 49 であり、全回答者の 46％の学生から回答が得られた。回答内容を分類してみると、良かった点として「パワーポイントや資料の作り方（15 人）」、「休

表 6. 2021 年度授業評価アンケート結果「この授業で良いと思うこと」

	自由記述回答内容
パワーポイント・授業資料	オンラインでもプリント記入が穴埋めだから授業を集中して聞くことができました
	スライドが要点をおさえられていてすごくわかりやすかった
	遠隔授業で難しい中、パワーポイントを上手く活用してわかりやすく丁寧に教えてくださったので、とても良かったです
	資料がわかりやすく、穴埋めで勉強しやすい
	資料の作り方
	動画が見やすくて聞き取りやすくてよかった
	遠隔だったけど声など聞き取りやすかったです
	授業資料がわかりやすい
	パワーポイントが見やすく、また声などが聞こえやすかったので、授業の内容を理解することができた
	先生の説明や動画、資料などをもとに説明してくれたのでわかりやすかったし、プリントなど穴抜きになっていたので大事な部分など覚えることができました
	パワポの作りや喋りがとても丁寧で分かりやすかった
	先生の説明などわかりやすく聞き取りやすいです
	教員がはきはきと話している
	説明が分かりやすい
	先生の説明がわかりやすかったです
休憩	間に休憩があったので集中を切らさずに授業を受けることができた
	授業中に休憩があり集中力が保ちやすかったです
	間の休憩があるので、集中力が切れなくてよかった
授業運営等	とても内容を理解することができわかりやすい授業でした
	挿し動画もあって、とてもわかりやすかった
	内容がわかりやすい
	難しい内容ではあったけど、わかりやすかったです
	毎回の復習をしてくれるところ
	理解したかどうかを生徒に聞いてくれるのでとてもよかった
	オンライン授業の中で動画を見たりして生徒にわかりやすく伝えるための工夫が伝わってきました。そのため、授業はもちろん理解しやすかったです。
	映像などを利用して説明がとてもわかりやすかった
	授業も分かりやすく、課題もしっかりと聞くと分かる内容しかないため良かった
	出席確認が早めにできたこと
	先生の授業の仕方が良かった
	授業の動画が残るので復習しやすい
	資料と動画を両方残していただいたので復習に活用できた
授業内容等	いままで知らなかった体育の歴史を知れたこと
	課題があるので授業に集中して取り組めた
	講義でたまに先生が見せる動画がスポーツをやっている身として共感できる部分もあったし、感動もした内容があったこと
	昔から発展してスポーツがあることがわかりました
	体育の歴史について深く学べてとても良かった
	体育の歴史に触れることができた
	特にオリンピックの歴史について深掘りすることができたこと
	分かりやすくて、とてもためになったのでこの経験を生かしていきたいと思った
	聞いていて面白い内容だった
	歴史について学ぶことができました
	授業の進め方も、内容もしっかりと理解できてとてもよかったです
	授業内容がとてもわかりやすく、さらに自分たちが専門として学んでいるスポーツについて深く知りたいと思った
	色々な歴史が学べる
	体育の歴史について学ぶ機会があり知識が増えていくことに楽しさを覚えました
	体育史の歴史について初めて知る事ばかりで面白かったです
	知らないことを知れて興味深い
	歴史と結び付けてよく理解できた
	柔軟な対応をしてもらえた

憩（3人）」、「授業運営（13人）」、「授業内容等・その他（18人）」であった。受講者の半数近くから良かった点があげられ、大きなトラブルもなく15回の遠隔授業を展開できたことは、前向きに捉えることができる。遠隔授業に向けて従来の内容を一部カットしたり、説明を短くしたりする部分はあったが、その半面、説明がクリアになるなど学生にとっては理解しやすいプラス面もあったことが読み取れた。先述の評価ポイントでは「教材やパワーポイントなどの使い方が効果的か」は、ややポイントを落としていたが、自由記述では「資料がわかりやすい」等のコメントが寄せられていた。その他に、授業で使用した音声解説付きパワーポイント動画を授業後にTeamsの教材フォルダにアップロードし、自由に閲覧できるようにした点も欠席者への対応や復習ができるという点で、有効だったといえる。このことから、2022年度は全面面接授業となったが、面接授業の解説とほぼ同様の音声解説付きパワーポイント動画を作成し、授業後に学生に公開するようにした。

一方、問27「遠隔授業で改善して欲しいと思うこと」についても5件ではあるが要望が示された。回答内容は、「課題が難しい（2件）」「授業で動画を見るとき、動画が見られなかったり、声が途切れたりしたときがあったので、そこを改善して欲しい（1件）」「録音を流していたのでオンデマンドでも可能と感じた（1件）」「課題に出すようなところは大事だと思うのでスライドにきちんと載せて欲しい（1件）」であった。課題が難しいという要望については、課題内容というよりも授業に興味関心を持たせるための一層の工夫が授業担当者には求められているといえよう。オンデマンドを要望する声については、面接授業と遠隔授業が1日の中で混在する場合には、その検討も必要であろう。COVID-19だけでなく、今後起こりうる様々な場面に対応できるよう、学生たちの状況を常に把握しながら授業の改善に努めていきたい。

5. まとめ

本稿では、コロナ禍後の授業実施状況や形態について、文科省や一般社団法人日本私立大学連盟の調査結果を概観した上で、筆者が担当する体育史を事例に報告した。

混乱の中でスタートしたコロナ禍における授業実施は、2020年の開始から3年目を迎え様々な課題が浮き彫りになってきた。私立大学連盟の調査報告にあった遠隔授業への改善要望は、学生たちのリアルな声であり、大学としては授業の実態把握に努めるとともに、それらの声に真摯に向き合い、改善を図っていく必要があろう。授業以外にも、コロナ禍による人間関係の希薄さによる学生たちへの影響も出はじめており、決して軽んずることはできない。COVID-19の5類への見直しに向けた議論も始められ、大学においても面接授業への移行が一気に進められているが、面接に戻せば課題が解決されるわけではない。コロナ禍以前に戻すことだけを目指すのではなく、コロナ禍によって得られた遠隔授業の利便性や有用性をいかしながら教育内容の向上を図るとともに、学生のメンタルヘルス改善に向けた大学としての取り組みを検討していくことが求められる。

他方、高等学校では2022年度から「歴史総合」[6]の授業が始まった。コロナ禍に続き、今度は学習内容の大幅な変更が必要になるだろう。今後の授業においても変化を前向きに捉えながら、体育・スポーツの歴史の学び方、学ばせ方を改めて考えていきたい。

注および引用・参考文献

1）一般社団法人 日本私立大学連盟（2022）新型コロナウイルス禍の影響に関する学生アンケート報告書（概要版）https://www.shidairen.or.jp/files/topics/3680_ext_03_0.pdf（2022年12月25日現在）
2）文部科学省ホームページ「学校に関する状況調査、取組事例等」の「高等教育段階」に掲載され

ている実施状況調査を活用した。表1では、以下3報告を用いた。

「新型コロナウイルス感染症の状況を踏まえた大学等の授業の実施状況について（令和2年5月20日時点）」https://www.mext.go.jp/content/20200527-mxt_kouhou01-000004520_3.pdf（2022年12月25日現在）

「新型コロナウイルス感染症の状況を踏まえた大学等の授業の実施状況（令和2年6月1日時点）」https://www.mext.go.jp/content/20200605-mxt_kouhou01-000004520_6.pdf（2022年12月25日現在）

「新型コロナウイルス感染症の状況を踏まえた大学等の授業の実施状況（令和2年7月1日時点）」https://www.mext.go.jp/content/20200717-mxt_kouhou01-000004520_2.pdf（2022年12月25日現在）

3）上記同様、文部科学省ホームページに掲載されている実施状況調査を活用した。表2では、以下4報告を用いた。

「令和3年度前期の大学等における授業の実施方針に関する調査の結果について（令和3年7月2日）https://www.mext.go.jp/content/20210702-mxt_kouhou01-000004520_2.pdf（2022年12月25日現在）

「令和3年度後期の大学等における授業の実施方針に関する調査の結果について（令和3年11月19日）https://www.mext.go.jp/content/20211118-mxt_kouhou01-000004520_1.pdf（2022年12月25日現在）

「令和4年度前期の大学等における授業の実施方針に関する調査の結果について（令和4年6月3日）https://www.mext.go.jp/content/20220603-mxt_kouhou01-000004520_02.pdf（2022年12月25日現在）

「令和4年度後期の大学等における授業の実施方針に関する調査の結果について（令和4年11月29日）https://www.mext.go.jp/content/20221129-mxt_kouhou01-000004520_1.pdf（2022年12月25日現在）

4）前掲1に同じ。

5）COVID-19の感染拡大が広がる中、国立情報学研究所主催の「4月からの大学等遠隔授業に関する取組状況共有サイバーシンポジウム」が2020年3月26日にスタートし、現在は「大学等におけるオンライン教育とデジタル変革に関するサイバーシンポジウム」（教育機関DXシンポ）として継続的に開催されている。情報がない中で、感染拡大当初はこれらの情報に頼りながら授業を展開していた。Facebookには「新型コロナのインパクトを受け、大学教員は何をすべきか、何をしたいのかについて知恵と情報を共有するグループ」も開設され、教員間の情報共有が進められた。

6）2022年度から導入された高等学校における「歴史総合」への対応も求められている。筆者が行ってきた従来の授業では、人類の誕生から、古代、中世、近世、近現代の体育・スポーツを通史的に扱ってきた。その中で、近代スポーツおよび学校体育が成立するまでの歴史的変遷の全体像を理解すること、身の回りにある現在のできごとを長い時間軸の中で捉える思考方法を身につけることを到達目標としてきた。しかしながら、「日本史A」と「世界史A」に代わって新たに「歴史総合」が設置されたことにより、体育史の授業内容や展開方法にも大幅な見直しが必要とされる。

「歴史総合」の特徴として、山川出版社の『歴史総合―近代から現代へ』の冒頭「歴史総合を学ぶにあたって」には、1）日本史と世界史を関連づけ、世界史の中で日本史を捉えようとする点、2）古代から現代への通史ではなく、おもに近代・現代を扱う点、3）現代に生きる私たちの社会のあり方や直面する課題について考えるという観点から、歴史をみようとする点、があげられている。また同書には、「このような観点から『歴史総合』では『近代化と私たち』『国際秩序の変化や大衆化と私たち』『グローバル化と私たち』という3部に分けて、おもに18世紀以降の日本の歴史を、世界の動きと密接に結びつけながら、学び、考えていくことをめざす。」と書かれている。

高等学校における地理歴史科の学びが「歴史総合」へと変更されたことを受け、体育・スポーツ史の学び方も従来の通史的に学ぶ授業内容ではなく、現代的な諸課題の形成に関わる限定的な時代を取り上げながら、日本と世界、時間と空間を関連付けて学び、体育やスポーツを考察する視点や探求する意識を育てていく必要が出てくる。「歴史総合」の考え方を用いながら体育・スポーツ史をみた場合、これまで以上に、私たちの身体的営みとしての体育・スポーツと世界や社会でのできごとを結びつけながら、理解することが可能になる。一方で、体育・スポーツという身体を伴う人間の文化としての営みを、歴史という長い時間軸の中で捉えて位置づけていくことの重要性やそのための思考方法をどのようにして学ばせていくかが課題でもある。さらには、教職科目の１つである体育・スポーツ史の場合、中学校・高等科学校保健体育の学習内容を盛り込んでいく必要も出てくる。

岸本美緒、鈴木淳編著（2022）『歴史総合 近代から現代へ』科学省検定済教科書 高等学校　地理歴史科用、山川出版社、東京.

高等学校学習指導要領（平成 30 年告示）解説　地理歴史編（平成 30 年 7 月、令和 3 年 8 月一部改訂）、pp.123-124.https://www.mext.go.jp/content/20220802-mxt_kyoiku02-100002620_03.pdf（2022 年 12 月 25 日現在）